

僕らの世界はこれからどうなるのだろう……。その答えを求めて、高校生8人の「ティーン特派員」は8月20〜24日、東南アジアのシンガポール、マレーシアの2国を訪れた。<激化する資源争い3>

ティーン特派員 in 東南アジア!!



シンガポールに向かう全日空のボーイング787型機はビジネス客で満席。面積は東京23区程度の小さな国だが、ここは世界屈指の企業が集まり、巨額資金が取り込まれる金融の一大中心地だ。

マレーシアの首都クアラルンプールで目を引いたのが石油や液化天然ガス（LNG）を輸出している国営企業ペトロナスの本社が入る、高さ452位の「ペトロナスツインタワー」だ。実はペトロナスにとって日本は重要な取引先の一つなのだ。

震災後の日本ではすべての原子力発電所が運転を停止したため、足りない電力はLNGなどを燃料とする火力発電所に頼っている。日本に入るLNGの約2割はマレーシア産で、輸入量は第3位（2013年実績）に上っている。

*Liquefied Natural Gas



全日空のボーイング787型機

ティーン特派員とは

ティーン特派員の8人は「海外プロジェクト探検隊」（主催・読売新聞社、特別協賛・三菱商事、協力・全日空）の11期生から選出された。慶応大学法学部の浜谷秀芳教授（国際政治学）も特別協力。浜谷ゼミの大学生たちが特派員の高校生たちを強力にサポートし、東南アジアの取材にも同行した。特派員は今回の取材結果をもとに12月までに「提言」をまとめる予定だ。

*各特派員による報告は、今後も紙面で紹介します。

資源ビジネス 最前線



クアラルンプールを訪れたティーン特派員8人。背後にそびえるのは石油や天然ガスを取り扱うマレーシアの国営企業の本社が入る「ペトロナスツインタワー」だ（8月23日）

日の丸背負う 商社マン直撃

シンガポール マレーシア

今回、取材に応じてくれたのは、激しい競争が展開される海外のビジネスの最前線で「日の丸」を背負う商社マンたち。日本と同じ資源小国のシンガポール。国の豊かさの秘密を解くカギの一つが税金の安さだ。三菱商事シンガポール支店総務人事務部長の福元邦雄さんは「利益を上げそうな業種の税金を安くするなど、外国の優秀な企業が集まるよう国全体で知恵を絞っている」と分析した。

シンガポールで天然ガス販売を手がけるダイヤモンド・ガス・インターナショナル社長の藤原彦さんは、めまぐるしく変化する世界の資源獲得競争の現状を解説。日本のLNG輸入量は世界一で全体の3分の1を占めているが、「最近では中国が猛烈に追い上げている」と膨張する中国パワーの実情を語ってくれた。

マレーシアで取材に応じてくれた三菱商事常務執行役員森山透さんは東南アジア、インドなど17か国を担当。特派員たちに、海外諸国の人たちを相手にする時のカギを伝授してくれた。「日本人は『ウソをつかず最後までやり抜く』とい



う評価があり、アジアで非常に信頼されている」と語り、「相手の国を好きになるという姿勢でいけば、必ず通じる」とアドバイスした。

▲シンガポールの三菱商事支店を取材する特派員たち（左）
▲東南アジア諸国など17か国を担当する森山常務執行役員も取材に応じて（23日）



巨大LNG基地に迫る

マレーシア

日本の電力を支える資源はどこからくるのか。クアラルンプールから飛行機で南シナ海を越えてボルネオ島に渡り、LNGの供給基地があるピンツルを訪れた。

海岸沿いにある供給基地は、ペトロナス、三菱商事などが出資している。南シナ海で掘り出された天然ガスは基地で液体にされてLNGとなり、日本にタンカーで運ばれている。

基地内では漏れ出したガスが引火して爆発する恐れがある。「非常用のサイレンが聞こえたら全員退避します」。事前説明を受けた上で、黄色の防護服に安全靴、ヘルメットを着けた物々しい姿で基地の中心部へ。

ガス田とつながるパイプライン。巨大な備蓄タンク。接岸するタンカー。技術者の説明を受けながら、バスで基地内をまわった。同行した、三菱商事ピンツル分室の下越留章さんによると、ここで積み込まれたLNGが日本に着するのはわずか1週間後。そのまま発電所の燃料などとしてすぐに消費されているのだ。



▲液化されたLNGは地中に埋まったタンク（右奥）でいったん貯蔵。パイプラインを使って次々と接岸するタンカーに積み込まれる（三菱商事提供）



供給基地 マレーシア 天然ガスの運搬の流れ 受け入れ基地 日本

言語や宗教 様々

マレーシア、シンガポールは世界有数の「多民族国家」。マレー系、中国系、インド系などに分かれ、宗教、言語、食生活も様々だ。特派員の関心は、イスラム教の厳格な規律とビジネスとのかわりに集まった。

ピンツルのLNG基地では従業員約1400人の多くがイスラム教徒。基地には礼拝施設があり、日中の決まった時間は、礼拝で仕事の手を休めなくてはならない。現地のスタッフは、宗教の異なる従業員同士で休みの時間をずらすと

いう勤務の「助け合い」を紹介。「宗教が違って、お互いを尊重

することが大切なのはビジネスでも同じ」と語った。

全国のローソンで、君の作品が流れるよ

「幸せ」を感じる動画・放送コンテスト

テーマは「幸せは、そばにある」。読売中高生新聞は創刊記念で、大手コンビニエンスストア「ローソン」と、動画・放送コンテストを開催します。日常生活の中で見落としがちな幸せを、音声なしの短編動画（13秒）か音声放送（20秒）で表現して下さい。優秀作品はローソンの全国約1万2000店舗で、レジ映像や店内放送で紹介されます。参加は個人でも、グループ、部活でもOK。1日1000万人以上が訪れる「大舞台」で、あなたの思いを発表しよう！ヨミウリ・オンライン（YOL）の中高生新聞コーナーでは、多摩大学目黒高校（東京都目黒区）放送部の試作品を公開中。



レジ映像や店内放送として公開

笑顔になれる作品を待っています

ローソングループあきこちゃん 大学2年生。ユニホームがかわいいので、アルバイトを始める。ローソンTwitter店に勤務。

コンテストの概要
【テーマ】幸せは、そばにある
【応募資格】中学生、高校生（個人、グループ問わず）
【応募部門】「身近にある幸せ」をテーマにした動画作品、または放送作品を制作する
①動画部門（13秒）表現方法（実写、CG、アニメ等）は問わない。音声不要
②放送部門（20秒）

【応募方法】
①動画部門：動画を収めたDVD媒体を郵送、または動画を応募者アカウントでYouTube上に公開し、その動画URLをメールで送付する
②放送部門：音声を取録したCD-Rを郵送、または音声ファイル（MP3形式）をメールで送付する

【応募先】
〒103-8601 日本橋郵便局 読売中高生新聞係
メール chukousei@yomiuri.com
【応募期間】9月16日から12月31日（必着）
【発表】来年1月下旬（予定）に読売中高生新聞で
【問い合わせ】読売中高生新聞編集室（chukousei@yomiuri.com）へ、連絡先を明記したメールで

ティーン特派員の感想(50音順、敬称略)

渋谷教育学園渋谷高2年 綾井 祐介
日本企業が人種も宗教も違う国で事業を展開する難しさを目の当たりにした

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高1年 一ノ瀬 智裕
外資を集めるシンガポールの強気な姿勢に日本も学ぶべきものがあると思う

京都市立堀川高1年 上原 朋子
多民族の2国を訪問して日本の閉鎖的な考えを実感し、強い危機感を抱いた

大妻高2年 黒川 睦子
資源・エネルギーの獲得をめぐる日本の交渉力の弱さを知って、驚いている

渋谷教育学園幕張高2年 笹川 都
文化の多様性が最大限生かされた国を訪問したのは、とてもいい経験だった

佐野日大中等教育学校4年(高校1年) 早瀬 あみ
他民族との「対話」の大切さを学んだ。対話を通して日本をより良い国にしたい

桐蔭学園中等教育学校5年(高校2年) 真坂 卓実
民族間の価値観の共有は視野を広げ、日本人にも必要な姿勢だと感じた

海陽中等教育学校4年(高校1年) 矢崎 佐慶
世界でLNG需要が増えていると聞き、今後のLNGビジネスが気になっている

写真は清水敏明撮影



働く大人に 密着します

あのシゴトに、このヒトあり！ その分野で活躍するプロフェッショナルに密着した「シゴトヒト」（毎週掲載）がスタートします。仕事の内容にとどまらず、働くことの大

変さ、大切さも聞きだし、みなさんの進路選択に役立つ情報を掲載してお届けします。10年後、あなたは紙面で紹介した職業に就いているかも!?

読売中高生新聞

*詳しい募集要項や注意事項は、YOLの中高生新聞コーナーに掲載しています。必ずチェックしてね!!

企画・制作 読売新聞社広告局

世界に輝く日本 私たちの力で

■海外プロジェクトの参加メンバー



◆海外プロジェクト探検隊とは？

「海外プロジェクト探検隊(読売新聞社主催・三菱商事特別協賛)」は、高校生が三菱商事の海外拠点を訪ねて海外ビジネスの最新動向を取材するシリーズ企画。次代を担う高校生が視野を広げ、将来に

海外プロジェクト探検隊

11回目となった今回は、シンガポールとマレーシアを訪れた。今回は、三菱商事が手がける発電所や自動車工場、コンビニエンスストア、住宅開発現場まで、幅広いビジネスの最新動向を、高校生たちが「川上から川下まで」と例えられるように、商社が取り扱うビジネスが資源・エネルギーなどのフロントを精力的に取材し、世界の資源獲得競争について理解を深めた。



海外で学び、自分たちで考えた「提言」を発表する高校生たち(よみうり大手町ホールで)

三菱商事の最前線取材体験から

高校生が同世代へ提言

フォーラムでは、三菱商事の廣田康人・常務執行役員一写真が「8人のティーン特派員」がビジネスの最前線の熱気を感じ、考えた、日本のあるべき姿への素直なメッセージを交わしている。会場の皆様も、彼らの提言を聞いて、日本の未来に思いを託していただけたらと思っている」とあいさつした。

その後、数学者で大道芸人のフランク・フランクルさんが基調講演し、「たとえ英語ができて国際人になれるわけではない。民族や国籍、宗教などが異なる人と出会うときに、心を開く『寛容さ』が大切だ。心の門

を開き、旺盛な好奇心を持ってほしい」と呼びかけた。

続いて、読売中高生新聞の「ティーン特派員」に選ばれた海外プロジェクト探検隊の高校生8人が、昨年8月にシンガポールとマレーシアで三菱商事が展開するビジネスの最前線を取材している様子を映像で紹介。その後、8人が帰国後、数か月間について議論を重ねてきたと語り、提言を披露した。

提言は、「資源・エネルギー」「日本式ビジネス」「多文化・多民族共生」「日本の発信力」と幅広い分野に及んだ。10代の研ぎ澄まされた感性で発信されたフレッシュな提言を、会場を埋め尽くした同世代の学生ら数百人の来場者は、メモを取るなどして熱心に聞き入っていた。

次代を担う高校生が日本の未来について提言する「ティーン未来フォーラム」が、12月26日、東京・大手町のよみうり大手町ホールで開催された。中学生やその保護者、学校関係者など日本の将来を考えるきっかけにもなるのが狙い。フォーラムでは、三菱商事海外展開プロジェクト「海外プロジェクト探検隊」11期生に選ばれた高校生8人が、3人で1つの「提言」を同世代に向けて発信した。



大妻高校 黒川 瞳子



海陽学園 海陽中等教育学校 矢崎 佑磨

「日本のエネルギーの安定供給と新エネルギー開発について理解を深めよう」

東日本大震災後、全国で原子力発電所は稼働を停止してしまいが、現在、電力は安定供給されています。それは、私たちが訪れたマレーシア・シンガポールの液化天然ガス(LNG)プラントで生産された

講評



添谷芳秀・慶応大教授
インドネシアでは、三菱商事と韓国ガス公社が共同でLNG開発に取り組んでいる。世界のLNGの50%以上を輸入する日本と韓国が相互補完的に協力している良い例だ。第三国での、日本と他の国との協力のあり方へも関心を広げてほしい。



ピーター・フランクル(数学者・大道芸人)
海外に行くことの一番の意義は「日本を見つめ直す」ということだ。外国のことを知ることも大切だが、それを帰国後にいかして、自分の国を良くすることがより大事。今回の経験をそのきっかけにしてほしい。



森野り子・読売新聞調査研究本部主任研究員
原油価格の急落が世界を揺るがす中で、エネルギーに関する提言はタイムリーだ。海底資源にも触れているが、日本の管轄海域の広さは世界6位であり、指摘されている「開発主導権を」という心気気は大切でしょう。

トピックス

高円宮杯英検大会の入賞者
高円宮(全日本)中学校英語弁論大会は、「日本の日本を英語で国際性を養う青少年を育てよう」というテーマで開催された。学校内の予選も含めて、毎年数万人の中学生が参加し、戦後の教育史上大きな足跡を残してきた。



充実の留学体験 2週間英語を特訓
入賞者の英国短期留学制度が上位設置される充実度を増している。65回(2013年)の入賞者3人は「ティーン特派員」として、英国ロンドン・サセックス州のフロンティア・カレッジで2週間、英語特訓プログラムに参加、英語力に磨きをかけた。

主催：読売新聞社

特別協賛：三菱商事

後援：外務省、マレーシア大使館

提言の全文はヨミウリ・オンラインに掲載しています
<http://www.yomiuri.co.jp/teen/labo/reporter/>



提言 「日本を世界に発信するためコミュニケーション能力を高めよう」

日本人のアイディアはとも良い。けれども、そのアイディアを発信する力が足りないと。探検ツアーに出発してマレーシア人に言われた言葉も、私たちが聞くだけで止まりました。



白黒をはっきりさせず、和を尊ぶ日本人の美徳は、世界では通用しない。その美徳を知る必要はない。コミュニケーション能力を高めるため、学校でテキストカッションをして、相手と納得できる

力を意識して養成する必要がある。シンガポールやマレーシアでは、英語、中国語、マレー語を多言語使いこなす人々に出会いました。言語発信力の基礎で、相手の文化を知る重要な窓口です。異文化を理解するには、まず日本の文化・歴史を学ぶ必要があります。身近な歴史遺産、文化に触れ、小さなことで、浴衣や着物を通して敬意や初節句に行くなど、できることを積み重ねることで教養が高まり、財産となるはずです。



提言 「世界の文化・民族の多様性に敬意を払おう」

マレーシアで液化天然ガスのプラントを見学した際、働いている様々な人種の人々の間で、積極的な「対話」が行われているのを感じました。例えば、イスラム教徒が多いと心配



慮して、施設内に小さなモスク(イスラーム教礼拝所)が設けられるなど、多民族の労働者が気持ちよく働けるための環境を整えているとは新鮮でした。ここで一言、対話とは、一側面でのキャッチボールを意味していません。上手なキャッチボールを行うため、まず日本への深い理解が必要で、それが基準となり、互いの文化となり、多民族、多文化への理解が進みます。また互いの文化などの「違い」に敏感になり、また「違い」を歓迎・尊重することで、円滑な対話ができるようになるはずです。

ル」を意味しています。日本の中でも、少数民族は在日外国人がいて、多様な民族や価値観が存在しています。こうした「マイノリティ」の中には、周囲の無知や無関心、偏見から思いをこらして入っています。上手なキャッチボールを行うため、まず日本への深い理解が必要で、それが基準となり、互いの文化となり、多民族、多文化への理解が進みます。また互いの文化などの「違い」に敏感になり、また「違い」を歓迎・尊重することで、円滑な対話ができるようになるはずです。



提言 「世界を明るくする日本式ビジネスを目指そう」

三菱商事のよな「総合社」は、世界に類を見ない日本独特の形態です。買収だけでなく、事業投資も、産業の「川上」から「川下」、つまり商品の生産から販売まで幅広く関与する「パブリック」を築いてきたのだと考



ユニバーシティ)を築いて付加価値を生み出しています。海外では雇用創出効果にも貢献しています。信頼やきめ細かなサービス、日本人の美徳をいかしてビジネスが世界に受け入れられているのだと考

将来、私たちの世代全員が海外とのビジネスを行うわけにはないですが、グローバル化の時代で、外国人との接点は増え、日常的な交流が生まれます。一人一人が、「日本人は信頼できる」といった良い印象を外国人に与えれば、小さいけれど、日本の活路を開いていく確実な一歩となるはずです。自分の「チカラ」を磨き、外国の価値の源を重視することが、我々も世界を明るくする「日本式ビジネス」の始まりではないでしょうか。